

赤十字 NEWS

12

DECEMBER 2025
#1027

赤十字NEWS
WEB版はコチラ



ご存じでしたか? あの国の苦しみ。



特集 ▶ P.2 12月は「NHK海外たすけあい」

人道支援に空白地帯をつくらない



モンゴル国



コンゴ民主共和国

エムボックス(サル痘)に感染と
推定された人

2024年に発生した雪害の被災者
約72万5000人

9万4000人



ウクライナ



スーダン共和国



高度な食料不安に陥っている人

約2600万人

※出典(WEBサイト):外務省「モンゴル国における雪害被害に対する緊急援助」/UNICEF「Humanitarian Situation Report No.7」(期間2024年1月~2025年3月)/
UNHCR「活動地域 ウクライナ」/国連食糧農業機関(FAO)・世界食糧計画(WFP)共同リポート『Hunger Hotspots』(2025.11~)

TOPICS

150人が参加した避難所訓練
地域の保健師と日赤救護班の連携強化 P. 5

連載

新連載・海外派遣の現場から
パプアニューギニア編 P. 4
けんけつのいま P. 5

AREA NEWS

[北海道] 北海道の地域医療を支える
看護師の卵たち「最後の戴帽式」
[香川・福井] 南海トラフなど
大規模地震災害に備えて
実践的な想定の
救護訓練を各地で/他 P. 6

WORLD NEWS

ウクライナ人道危機
絶望を超え、歩み出すためのリハビリ支援 P. 8

Present!

ドクターエア 小型マッサージ器
エクサガン LUXE

プレゼント!
6名様



詳しくはP.7をCheck! ▶

SPECIAL FEATURE

12月は「NHK海外たすけあい」

人道支援に空白地帯をつくらない

ウクライナやイスラエル・ガザなどの人道危機、世界各地の大災害が大きく報道され、人々の関心を集め一方で、困難な状況にありながらも注目度が低く、支援が届きにくい国々もあります。今回はそのような国の中から、赤十字が支援を行う3つの国の状況をリポート。紛争、感染症、自然災害というそれぞれの難局と、それをサポートする人々の姿をお届けします。

01

スーダン共和国



アフリカMAP

スーダンで何が起きた?

「倉庫の略奪やボランティアの襲撃を受けてもなお、『忘れられた紛争』の支援を続ける赤十字」

2023年4月15日に、スーダンの首都ハルツームで内戦が勃発。2年半以上が経過した今でも収束のめどは立たず、この内戦をきっかけに、約1450万人の人々が国内外への避難を余儀なくされ、人口の約半分である3000万人以上が人道支援を必要としている。1万校以上の学校が閉鎖、水・電力・衛生設備が寸断される中で、医療インフラへの打撃は特に深刻で、紛争の影響を受ける地域では80%以上の病院が機能不全に陥っている。その上、医療施設への攻撃が累計440件を超えるなど(2024年10月時点)、暴力行為や妨害行為も後を絶たない。また、コレラ、デング熱などの感染症も流行しており、安全な飲料水の確保と公衆衛生の改善が急務となっている。



ICRCが支援する病院で治療を受けるスーダンの人々
©GUEIPEUR, Denis Sassou/ICRC

2023年の内戦により、スーダンでは15万人以上が戦闘により命を奪われた危機的状況にもかかわらず、「忘れられた紛争」と言われるほど、世界からの支援が足りていない現実があります。

国内全18州に支部を持つスーダン赤新月社(以下、スーダン赤)は、紛争初日からこれまでに、延べ9000人以上のボランティアと共に、絶え間ない人道支援活動を続けています。救急搬送や応急処置、食料や水の配布、避難支援、家族との再会支援など、約135万人に対して支援を提供してきました。2023年4月には、北ハルツームのスー

ダン赤支部の倉庫に何者がか侵入し、救急車両や物資が奪われる事件が発生した他、2025年にはスーダン赤のボランティア5人が活動中に襲撃を受け殺害されました。スーダン赤のボランティアで看護師のワジダンさんは、「2023年の紛争以後、私は国民として、ボランティアとして、これまでの人生で最もつらい体験をしました」と語ります。彼女は、避難キャンプで暮らす子どものケアや食事の配布に携わる中で、爆弾でひどいがを負った人々の姿や、家族を失った人々が訴える悲しみなど、多くの凄惨な出来事に直面してきました。今なおその状況は続

きますが、多くのボランティアが諦めることなく、この人道危機に対応しています。

また、赤十字国際委員会(ICRC)では、戦傷者の治療にあたる国内88カ所の病院施設の支援や、水道の復旧支援、国内避難民に対する緊急生計支援などを行っています。ミリアナ・スピアリッチ ICRC総裁は「国際社会はスーダンの民間人が想像を絶する恐怖に耐えているのに見て見ぬふりをしてきました」と批判。「民間人は残酷な攻撃や横行する性暴力、必要不可欠なサービスに対する故意の攻撃にさらされています」と指摘した上で、「スーダンの人々の運命は、この残虐行為を食い止めるための断固たる行動にかかっています。民間人が安全や尊厳を奪われ、民間人を守るべき戦争のルールが踏みにじられているのを、世界は傍観してはなりません」と訴えています。ICRC保護要員として駐在する日本人職員・淡路愛さんは、

「人道危機のスケールがあまりにも大きく、援助が追いつかないのが現状。それでも、私たちが提案する支援に喜び、涙する人々の姿が救いです」とも。一人でも多くの人がこの「忘れられた紛争」に関心を寄せることが、スーダンの人々の救済につながります。

「NHK海外たすけあいキャンペーン」は12月25日(木)まで!

日本赤十字社とNHKは、例年12月に支援を必要とする海外の国々のための募金キャンペーンを実施しています。これまで支援した国、地域は世界170カ国。今回は、「人道支援に空白地帯をつくらない。」をテーマに、集められた寄付は世界各地で紛争、災害、病気などにより苦しんでいる人々を支援するとともに、人びとのレジリエンスを高めるための活動に役立てられます。



詳しくはコチラ



02

コンゴ民主共和国



DRC赤は、水系感染症対策として、南キヴ州に複数の塩素消毒施設を設置
©IFRC

コンゴで何が起きた?

コンゴ民主共和国は、熱帯雨林や野生動物と距離が近い生活環境、水衛生インフラの脆弱さなどにより、マラリアや腸チフスといった風土病が常時まん延し、医療資源を圧迫している。加えて、近年ではエボラ出血熱やエムボックス(サル痘)、コレラなどの感染症が短期間に急激に症例数を増やす事例も多く、深刻な問題となっている。

安全な水の確保と下水道の整備が課題
©コンゴ赤十字社



複数の感染症が同時にアウトブレイク

ボランティア=「信頼できる隣人」が一丸となって啓発

コンゴ民主共和国(DRC)で2023年～2025年に流行した複数の感染症に対しDRC赤十字社(以下、DRC赤)および国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)は、継続的な支援を行ってきました。

2025年、同国において16回目のエボラ出血熱の流行が発生。DRC赤とIFRCは、政府機関やWHOと連携し、即座に対応チームと地域ボランティアを派遣しました。ボランティアは誤った知識で地域社会が不安に陥らないよう啓発活動に尽力。DRC赤社長は彼らの活動を「単なる情報の伝達者ではなく、『信頼できる隣人』として、個別訪問で病気に関する正しい情報を共有し、住民の安心を支援した」と評価しています。

2023年に市中感染が拡大したエムボックスは、2025年には感染増加。DRC赤では、流行前から支援プログラムを通じて地域ボランティアの育成を行っていましたが、流行拡大後はその数を倍以上の700人超に増やしました。彼らは、地域内で症状を示す人を見つけ出し、保健局への通

報、治療施設への案内、予防行動の啓発などを実施しています。

また、2025年は全国で3万3000人以上がコレラに感染し、死亡率2%を記録しました。特に南キヴ州のロメラ村では、金鉱発見によって人口が急激に増加し、衛生環境が悪化したことで爆発的な感染が起こっています。DRC赤は、浄水設備の設置や衛生キットの配布などを実施。ワクチン接種キャンペーンも展開し、数千人に予防接種を実施するなど、地域住民への衛生教育と感染予防の啓発活動を強化しています。



イラストの説明ボードを用いて、感染症予防のための知識を伝える赤十字ボランティア
©Esther Nsapu/IFRC

03

モンゴル国



ゾドによる寒波を乗り越える遊牧民と家畜
©モンゴル赤十字社

モンゴルで何が起きた?

モンゴルでは毎冬、「ゾド」と呼ばれる大雪(自然災害)が人々の生活に大きな影響を及ぼしている。その発生頻度と規模も悪化の傾向にあり、モンゴル赤十字社(以下、モンゴル赤)によると、2023年～2024年の冬季は約800万頭以上の家畜(国の総数の12.5%)が死亡し、18万世帯以上の遊牧民が経済的困難に陥った。



家畜を失った家族や豪雪から難を逃れた少年のため
再起と「こころのケア」をサポートするモンゴル赤十字社

モンゴルのトゥブ県で、妻と4人の子どもと暮らすスフバーチルさんは、2023年11月のゾドで、貴重な財産であり生計手段でもあった家畜の92%を失いました。元々育てていた家畜400頭のうち生き残ったのはわずか30頭で、暮らしは困窮。この家族の状況を知ったモンゴル赤は、すぐに職員が心理社会的支援の提供を開始し、「再び立ち上がる」という励ましと「こころのケア」を続けました。雪が落ちていた後は家の訪問し、家計の再建も後押し。新たな手段で収入を得るために必要な機材や物資の支援に加え、実際に収入を増やすためのレクチャーを行いました。その結果、一家は地域の注文を受けて乳製品を販売する小さな酪農事業を始め、少し回復と再生の道を歩んでいます。

豪雪で知られるバヤンハイルハン郡に住む遊牧少年・ビヤンバツォグトさんは、2024年2月、家族同然の羊たちの様子を見出かけた際に、雪嵐に見舞われました。家へ帰ることができないまま日が暮れ、気温は氷点下35度に。羊の群れも吹

雪で流される中、少年は群れの中に座ることで必死に寒さをしのぎました。そばに寄り添っていたヤギが、彼が眠りにつかぬよう一晩中角で突いて起こし続けたこともあり、翌朝、無事救助隊によって救出。モンゴル赤は少年の家庭を訪問し、心身ともにダメージを受けた彼と家族に対して「こころのケア」を行うと同時に凍傷や低体温症の応急手当をレクチャーしました。天気予報や安全情報を確認する方法について助言も。少年は命を救ってくれたヤギと羊と共に、生活を続けています。



赤十字からの支援で入手したクリーム分離機で販売用バターを作るスフバーチルさんの妻
©モンゴル赤十字社

海外派遣の現場から

パプアニューギニア編

世界の現場で出会った人々とのふれあい、その土地でしか感じられない息づかい。

赤十字の国際要員たちが見た、笑顔や驚き、そして心に残る瞬間をお届けします。



日赤は、世界191の国と地域に広がる赤十字のネットワークを生かし、資金や物資の支援にとどまらず、医師・看護師・プロジェクト管理担当などを現地へ派遣、地域に根差した人道支援活動を展開しています。

世界各地に派遣される「国際救援・開発協力要員(国際要員)」は、**赤十字独自の研修を修了し登録された専門人材**。活動の領域は、自然災害や感染症流行時の医療支援、衛生教育の普及、地域の防災力向上など、多岐にわたります。

今回から始まる新連載『海外派遣の現場から』では、世界各地で活動している日赤の国際要員が、**現地の食や文化、人々との交流を通じて感じたことなど、活動の舞台裏を紹介**。

第1回目は、太平洋の島国・パプアニューギニアから。生命力あふれる文化と豊かな自然、そして人々のあたたかな笑顔に包まれた国での活動を、北原一希さんが振り返ります。

ようこそ、PNGへ!



北海道から南下したところ、オーストラリアの北東に位置する島国、パプアニューギニア(以下、PNG)。日本の国土の約600以上の島々から成る自然豊かな国です。熱帯雨林には、国旗にも描かれている極楽鳥をはじめ、ヒクイドリや木登りカンガルー、羽を広げると30センチを超える蝶“アレクサン德拉トリバネアゲハ”など、多様な生き物が暮らしています。

一方で、首都ポートモレスビーでの生活は決して楽ではありません。道路には穴が多く、渋滞もしばしば。停電も一日に何度も起こります。治安の面でも注意が必要で、私が暮らしていたアパートでは一人で敷地外に出ることが禁じられています。

した。安全上の理由から、通勤も買い物も送迎車での移動です。それでも、街ですれ違う人々はいつも笑顔で、手を振ってくれる。その明るさに、何度も救われました。

私は、パプアニューギニア赤十字社、そして同じ敷地内にあるIFRC(国際赤十字・赤新月社連盟)パプアニューギニア国事務所で、現地スタッフと共に事業や財務、総務のサポートを担当しました。英語の資料やメールに苦戦しながらも、少しずつ理解が深まり、彼らとの距離が近づいていくのを感じました。

印象に残っているのは、独立記念日にスタッフたちが準備してくれた伝統料理「ムームー」です。前夜から事務所裏で穴を掘り、早朝に石を焼いて、バナナの葉を重ね、カウカウ(甘い芋)やマリネした豚肉を入れて蒸し焼きにします。豚はス

ムームーの準備、楽しいね!



タッフの親戚が山で狩ってきた野生のもの。手を脂で光らせながら笑いあい、焼き芋や野菜をほおばる——**心から、大地に「ありがとう」と感謝したくなる雄大な味**でした。

多様な文化と、時に厳しい現実。その両方がこの国の姿です。派遣を終えた今も、あの笑顔と大地の匂いが、心の中で静かに息づいています。

森の向こうまで、ずっとPNG!



部族の民族衣装をまとって独立50周年記念日を祝う。羽根飾りを被っているのが北原さん
©Maki Igarashi, IFRC



極楽鳥



機内から見たPNGの国土。見渡す限りどこまでも、肥沃な緑の大地が広がっていました!

T P I C S

本記事の訓練や、
男鹿半島で展開した
陸海空の大規模訓練
の様子を動画で! →



150人が参加した避難所訓練 地域の保健師と日赤救護班の連携強化

北海道・東北6県からなる日赤第1ブロック支部*では、10月10日から11日の日程で「**令和7年度 日本赤十字社第1ブロック支部合同災害救護訓練**」を行いました。今回は秋田県男鹿市で、第1ブロックの日赤救護班に加え、地元奉仕団や保健師ら、約150人が参加。1日目は日本赤十字 東北看護大学にて、独自のカリキュラムによる避難所アセスメントに関する机上訓練を行った他、神

戸赤十字病院の岡本貴大医師を迎えて、令和6年能登半島地震での救護活動について聴講。2日目は男鹿市総合体育館を会場に、秋田県の近海を震源とする大地震が発生した想定で実動訓練を実施。災害対策本部、避難所、保健医療福祉調整本部などのチームに分け、避難者への診療や避難所の環境改善などについて、手順や連携を確認しました。

*日赤では全国を6つのブロックに分け、広域事業の運営体制を構築している。第1ブロックは、北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島が含まれる。

2日目



A～Dの4カ所を
2巡(1巡・50分)して課題を解決



地元奉仕団による、きりたんぽ鍋の炊き出しも実施

1日目



避難所の環境改善などを学ぶ、避難所ゾーニング研修

けんけつの いま 支える命、つなぐ未来。 vol.9

このコーナーでは、献血を推進するために各地で行われ
ているさまざまな取り組みを紹介していきます。



命を救う「さい帯血」、その力を知ってほしい

白血病などの血液疾患で苦しむ人を助けるために「骨髄バンク」があることは、広く知られています。これは、健康な人が骨髄などから血液を造る細胞(造血幹細胞)を提供する仕組みですが、ドナー(提供者)に一定の負担がかかります。一方で、「さい帯血バンク」という仕組みをご存じでしょうか? これは、お母さんと赤ちゃんをつなぐ、出産後に廃棄される胎盤とへその緒(さい帯)に含まれる血液を使い、治療に役立てるもの。**ドナーに出産以外の痛みや負担はなく、また、さい帯血移植では必要とされるドナーと患者の白血球(HLA)型の一致度が骨髄移植よりも緩やかであるため、ほぼ全ての患者に適合するさい帯血を見つけることができます。**全国6カ所のさい帯血バンクのうち、日赤は4カ所のさい帯血バンクを運営しています。日赤の血液事業本部、東史啓さんは次のように話します。

「血液疾患は骨髄の中にある造血幹細胞が正常に

赤血球、白血球、血小板を造れなくなる病気で、造血幹細胞移植を必要とする場合があります。さい帯血には、この造血幹細胞が多く含まれています。母子の安全が最優先となる出産において、移植用さい帯血の採取は協力産院の高度な技術と、何より**『移植を必要とする患者さんを救いたい』という熱意によって支えられています**。さい帯血バンクはまだまだ認知度が低く、協力産院でのお声がけで初めて知る妊婦さんが多いことから、日赤では普及啓発に取り組んでいるほか、採取技術の高い施設の先生をお招きして研修会を実施したり、バンク職員による採取施設への訪問回数を増やすなど連携強化に向けて取り組んでいます。**さい帯血バンクがより社会に浸透し、少子高齢化社会にあっても安定的に採取・供給することができれば、将来にわたって多くの命を救うことにつながる**、と考えています」



「さい帯血バンク」
について詳しくは



Area News

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

**北海道の地域医療を支える
看護師の卵たち「最後の戴帽式」**

「戴帽式」は、入学後の半年間に基礎看護学を集中して学び、これから実習で患者さんに関わる節目となる、「看護の道を歩む」という決意を形にする儀式です。10月31日、北海道の浦河赤十字看護専門学校では「最後の戴帽式」が行われました。今年の入学生は6人。同校は1990年に開校し、これまで800人以上の看護師を送り出してきましたが、2028年の6人の卒業によって閉校となります。同校の向井早霧副校长は「本校は地域との温かな交流を意識した教育を行ってきました。学生たちは、地域に愛されていることを実感し、地域に恩返ししたいという思いで集立ちます。戴帽式を終えた6人も、地域と人に寄り添う看護師になってくれることを願っています」と思いを述べました。

**県内の赤十字奉仕団が結集し、絆を深める研修会
九州北部豪雨被災地の視察も**

活動について説明を受け、参加者は熱心に聞き入り自身の糧していました。2日目は、前日の視察を踏まえ、「災害時に自分たちにできること」をテーマにグループワークを実施し、活発に意見交換しました。普段活動する場所や活動内容が異なるため、顔を合わせることのない地域奉仕団や特別奉仕団が、所属を超えて、共に協力し合うことの意義や喜びを再認識する機会となりました。

日赤大分県支部では、10月24日から一泊二日の行程で、赤十字奉仕団同士の連携強化と、防災・減災意識の向上を目的として、「大分県赤十字奉仕団研修・交流会」を開催しました。初日は、福岡県東峰村を訪問。平成29年7月九州北部豪雨で山腹崩壊や河川氾濫による大量の土砂・流木などで甚大な被害を受けた被災地を視察しました。同地域の復興に尽力した方のガイドにより当時の状況や支援

**南海トラフなど大規模地震災害に備えて
実践的な想定の救護訓練を各地で**

災害救護は、赤十字の使命です。日赤支部は、災害対策基本法に定められた指定公共機関であり、迅速かつ最善の救護活動を行うため、全国各地で訓練を実施しています。

香川県支部では、9月18日、10月17日の2日間、「令和7年度支部・施設合同救護員基礎研修会」を開催し、64人が参加。1日目は救護員の役割や救護活動の流れを理解した後、グループワークでトリアージや避難所アセスメントなどを学びました。2日目は被災地に派遣された想定で救護所の設営をし、救護所診療、巡回診療の災害救護活動の流れを確認しました。(①)

また、10月23日には、香川県石油コンビナート総合防災訓練に同支部救護班が参加しました。訓練は、南海トラフ地震によりタンクから軽油が漏えい・引火して

**「自ら考え行動する力」を育む!
JRC加盟園に防災教材贈呈**

日赤島県支部の活動を寄付などで支える組織、徳島県赤十字有功会は、「子どもたちが“自分の命は自分で守る”力を育み、いざというときに迷わず正しい行動がとれるように」との願いを込めて、青少年赤十字(JRC)に加盟する県内の幼稚園・認定こども園に向けて、幼児向け赤十字防災教材『まちがいさがしきかんはっけん』を贈呈しました。10月21日、鳴門教育大学附属幼稚園で行われた贈呈式には、年長児48人が参加。同有功会の川島周副会长から、代表園児2人に教材が手渡されました。贈呈式後は、実際に赤十字防災セミナーを開催。地震が起きた際に危険なことをイラストから探す場面では、子どもたち自らが考え、なぜその行動が間違っているのかを話し合う、頼もしい姿が見られました。

**商業施設で、大学祭で、動物園で…
各支部による啓発イベント**

日赤奈良県支部では、10月11日に県内のショッピングモールにて、近隣の消防機関と合同で初めての「消防防災フェア」を開催しました。同支部は心肺蘇生の体験、救急車や災害救援車の展示、子どもが救護服・ナース服を着られるコーナーを開設し、併せて献血も実施しました。消防と日赤オリジナルグッズの詰め合わせがもらえるスタンプラリーも好評で、ハートちゃんとけんけつちゃんも登場するなど、大盛況でした。(①)

香川県支部では、10月25日に開催された香川大学祭にブースを初出展。ブースの運営は、香川県青年赤十字奉仕団に加盟する同学と、香川県立保健医療大学、四国医療福祉専門学校、穴吹医療大学校の4校の学生が行い、支部職員や香川県赤十字安全奉仕団もサポート。

PRESENT!! “日赤トリビアクイズ”に答えてプレゼントを当てよう!

Quiz

Q. 次のうち、日赤が実施している募金は
どれでしょう? (1つだけ選択)

ア:赤い羽根共同募金
イ:NHK海外たすけあい
ウ:どちらも実施していない

ヒントは右の二次元コードから▶▶▶

プレゼント

ドクターエア 小型マッサージ器
エクサガン LUXE

軽くあてるだけで、
コリに“ピンポイント”刺激。
毎日の疲れを気持ちよくほぐす
コンパクトマッサージャー

約210gと軽く、最大約3,300回／分の振動で肩・腰・脚・腕のコリを心地よくケア。疲れた部分に“軽くあてるだけ”でほぐせます。付属アタッチメントで筋肉まわりから細かな部位まで対応。コードレス＆静音設計のため、自宅はもちろんデスクワーク中や就寝前にも使いやすい一台です。コンパクトでもパワーがあり、短時間でもしっかりとケアできるのも魅力です。

製品サイズ:
13.8 x 3.6 x 8.9cm
最長8時間の長持ちバッテリー
※色はお選びいただけません

6名様に
当たる!

ご応募は
こちらから

プレゼント希望者は右の二次元コードからご応募ください。
応募締め切り:12月31日(水)
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって
代えさせていただきます

赤十字NEWSオンライン版はコチラ▶▶▶

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください!



ウクライナってどんなところ?

東ヨーロッパに位置し、東はロシア、西はポーランド、スロバキア、ハンガリーなどと接する共和制国家。国土は日本の約1.6倍。紛争前の人口は約4116万人(2022年1月1日時点/ウクライナ国家統計局)。かつてはロシア帝国やソビエト連邦の統治下に置かれ、1991年のソ連崩壊に伴い、独立国に。

ウクライナ人道危機 絶望を超え、歩み出すためのリハビリ支援

2022年2月に紛争が激化し、3年以上が経過したウクライナ。日赤では当初から、ウクライナ赤十字社(以下、ウクライナ赤)への保健医療、社会福祉、組織強化の支援を行ってきました。今回は、その中でもリハビリテーション支援にフォーカスし、現地に派遣された理学療法士の声をお届けします。



リハビリ支援がつないだ縁 リヴィウ市長が 日赤の義肢製作所を訪問

ウクライナでは、2022年以前からリハビリテーション強化の必要性が指摘されてきましたが、人道危機が深刻化する中でそのニーズはさらに大きくなりました。ウクライナ国内には、元々270万人の障害を抱える方がいたと言われていますが、紛争の被害により手足を失ったり、頭部外傷や脊髄を損傷してしまったりと、その数は30万人以上増えて、現在は300万人にも上ります。(2025年2月現在)

日赤では、ウクライナ赤が行う訪問リハビリを含めた包括的なリハビリテーション事業を、ハード面とソフト面の双方から支援しています。ハード面では、リヴィウ市において、公立の2つのリハビリテーションセンターの建築と増改築、そして、資機材提供を資金面で支援しました。

そのリヴィウ市の市長であるアンドリー・サドゥイー氏が今年7月、日赤の義肢製作所(日赤千葉県支部付属)を訪問。義肢製作の技術者から日赤の義肢製作の歴史や義肢構造・製作工程の説明を受けました。また、**市長からは、日赤の支援により実現したリヴィウ市のリハビリサービスの説明があり、日本の人々の支援に対する感謝も伝えられました。**



リハビリ支援の成果は着々と。 一方で、赤十字スタッフも徴兵、 紛争の苦悩が重くのしかかる

日赤はこれまで、リハビリ支援のために3人の理学療法士を派遣。彼らは、専門的な

リハビリ人材の不足に対して、現地の理学療法士と理学療法アシスタントへの技術指導も行いました。ウクライナを支援する国際赤十字の中で、理学療法士を派遣したのは日赤のみ。そのうちの1人が、日赤愛知医療センター名古屋第二病院の理学療法士・中島久元さん。初めてリヴィウ市のリハビリテーションセンターを訪れた際の印象を、中島さんはこう語ります。

「最初の派遣は、紛争激化から約1年が経過した2023年の1月。私が赴任した病院には、紛争の激しい東部から次々に傷病者が運ばれてきていましたが、負傷によって義手・義足を必要とする人の数に対して、資機材もリハビリを行う専門の人材も不足していました」

ウクライナでは当時、義手・義足は国内であまり製造されていない状況で、ほとんどが海外からの輸入。入手するのも時間がかかり、義手・義足を着けた生活に慣れるためのリハビリや、退院後に日常生活を送るためのサポートもない、と、問題は山積だったそうです。その後も、2024年、2025年とリヴィウを訪れ支援を行った中島さん。**今年訪れた際に目にした光景で、現地のリハビリ支援の成果と進歩を感じることができました。**「最初の派遣で訪れた病院に立ち寄った際、病院の外の売店に歩いて向かう1人の患者さんが目に留まりました。よく見ると、彼の片手と両足は義手・義足。相当大きなけがだったと想像できますが、新たに体の一部となった義足で、すごく上手に歩いていたんです。義手・義足の質の向上と、リハビリ支援が確立しつつあることを感じました」

それでも、現地を取り巻く状況は決して明るくありません。

「住民は、常に不安を抱えながら生活をしています。西側でも空襲警報が鳴り響いて、いつミサイルが飛んでくるか分かりませんし、インフラが攻撃されて電気が止まってしまうことも。男性はウクライナから出ることは許されず、声がかかれれば戦地に向かわなくてはなりません。実際に私も、共に働いていた同僚2人が突然、翌日に戦地に向かうことが決まり、急な別れを経験しました。男性の訪問リハビリスタッフは、『訪問先で軍の人と遭遇して声をかけられたら…と考えると不安で、外に出るのを控えている』とも話していて、軍からの『君はまだ戦地に行っていないのか』と声を掛けられ、そこから徴兵に向けて手続きが始まる事を恐れているようでした」

ウクライナでは、すべての国民が紛争の当事者。負傷者や障害者をケアする側の人も、常に**「いつ自分も、このような痛ましい状態になるか分からない」という危機感と隣り合わせの中、支援しています。**

「病院のICUで目にした光景も、忘れられません。頭部への外傷を負って話すことさえ難しい若い男性の手を、パートナーであろう女性がずっと握りしめ、日々と話しかけていました。きっと2人で生きていく未来を考えていたはずなのに、と思うと、耐え難い気持ちでした。若者の未来を奪い続ける紛争が、一刻も早く終わることを祈っています」

終わりの見えない紛争の中を懸命に生きる人々のために、赤十字は支援を続けていきます。



義肢製作所で日赤職員から説明を受けるリヴィウ市長(右端)と、リハビリセンター建築家の男性



リヴィウ州のリハビリテーションセンターで活動する中島さん



巡回診療、在宅ケア、「こころのケア」に加え、訪問リハビリテーション事業も実施

©IFRC